

【千代田の景観と観光を考えるシンポジウム】

講 演 録

日時：平成22年10月14日（木）

午後18時30分

会場：明治大学駿河台キャンパス

「リバティホール」

千代田区議会

区民集会運営協議会

午後6時30分開会

第1部 司会（林富士見地区町会連合会会長） 皆さん、こんばんは。大変長らくお待たせいたしましたけども、これより、千代田区の景観と観光を考えるシンポジウムを開催いたします。

町会の皆様初め、関係団体の方々には、大変お忙しい中、このように多くの方々にご参集をいただきまして、まことにありがとうございます。

私は、本日のこのシンポジウム前半の部分を司会をさせていただきます、富士見地区町会連合会会長、また区民集会運営協議会の副座長というお役目になっております林でございます。今日は、皆さん方の協力を得ながら進めてまいりたいと存じますので、よろしくお願いを申し上げたいと思っております。よろしくどうぞ。（拍手）

ここで、資料の確認をさせていただきたいと思えます。先ほど受付のほうでお配りした袋には、本日の区民集会のしおり、こちらでございます。それと、アンケート用紙と、それと基調講演のレジюме「江戸の社会、武士と庶民、そして現代」等が同封してありますが、ご確認をお願いしたいと思います。もしお手元に一つでも欠けておるものがございましたら、お申し出をいただければと思っております。よろしいでしょうか。

はい。また、一つお願いがございます。このアンケート用紙は、お帰りの際に受付のほうに回収をさせていただきますので、ここもひとつご協力をお願いしたいと思いますと思っております。

また、携帯電話につきましては、こういう会でございます、講演の進行に支障を来すといけませんものですから、ぜひ電源をお切りいただくか、また、マナーモード等に設定をしていただければと思っております。ひとつご協力を賜ればと思えます。ひとつよろしくお願いを申し上げます。

それでは、ごあいさつをお願いいたします。桜井議長、大山副区长さん、そして、このたびご講演をいただきます徳川恒孝様にご登壇をお願いしたいと思います。（拍手）

それでは、講演に先立ちまして、この会の主催者を代表いたしまして、桜井ただし千代田区区議会議長より開会のごあいさつをさせていただきます。よろしくお祈りいたします。

桜井議長 皆さん、こんばんは。ただいまご紹介をいただきました、区議会議長の桜井ただしでございます。

本日は、大変お忙しい中、このように大勢皆様お越しをいただきましたことを、本当にありがたく、お礼を申し上げたいと思えます。区民集会「千代田の景観と観光を考えるシンポジウム」、私ども千代田区議会議員、そして区内八つの連合町会の町会長様と一緒に区民集会運営協議会を立ち上げてございます。そしてこの区民集会は、千代田区が抱えるといえますか持ちます、さまざまな課題、さまざまな問題を、区民の目線で解決をいたしていこうと、そのようなことで区民集会運営協議会がスタートをいたしました。

過去には、相続税、固定資産税の減免の運動をしようじゃないか、そのようなこともいたしてきたところでございますが、今回は、観光をテーマといたしまして、皇居の持つ自然のすばらしさ、また、皇居の持つ景観のすばらしさ、これが、この千代田区の我々の活性化につなげることができないだろうか、そのようなことで、さまざまな調査・研究をいたしてきたところでございます。時には、ガイドの皆様にもご協力をいただきまして、皇居の中に入って、そして調査・研究もいたしてまいりました。講演会も数多く持ってきた

ところでございます。

そして、本日は、このシンポジウムの基調講演には、徳川宗家18代当主であります徳川恒孝様をお迎えをいたしまして、基調講演をいたすことになりました。そして、その後には、パネリストの皆様方に、パネルディスカッションを行っていただきます。後ほど司会者の方からご紹介があらうかと思えます。大変すばらしいパネリストの皆様でございます。どうぞ、この限られた時間ではございますが、皆様方には千代田の魅力を存分に味わっていただきたいと思えます。

申しおくれましたけども、本日はこのようなすばらしい会場をご提供いただきました明治大学の皆様には、本当に心から感謝を申し上げたいと思えます。本当に、きょうは限られた時間ではございますが、どうぞこの千代田区の魅力、存分に味わっていただきたいと思えます。

そして、このシンポジウムが終わりますと、10月の30日には、江戸城バスツアー、スカイバスを使ったバスツアーもございませし、また、皇居の中を実際に歩いていただいて、ガイドの皆さんにお話を聞いていただきながら、この皇居のすばらしさを満喫していただく、その江戸城ウォークも計画をいたしておるところでございますので、どうぞあわせてご堪能いただければと思っております。

結びに、皆様方、本当にお忙しい中をお越しをいただきました。主催者を代表いたしましてお礼を申し上げ、開演のごあいさつとさせていただきます。

本日は、どうもありがとうございました。（拍手）

第1部 司会 議長、ありがとうございました。

続いて、大山千代田区副区長よりごあいさつをちょうだいしたいと思います。よろしくどうぞ。

大山副区長 ご紹介いただきました、区役所の大山でございます。

本来ですと、きょう、石川区長が出席いたしまして、皆さんと親しくごあいさつを申し上げるところでございましたが、ちょっと急用、公務が入りまして、私、代理で参りまして、ごあいさつすることをお許しいただきたいと思えます。

さて、今、日本の社会経済状況、大変長い不況が続いておりまして、歴史的な円高だとか、こういう中で、どうも日本全体が疲弊感にさいなまれて、元気のない日本、そういう感じがしてなりません。こういう不況の中で元気を出していく何かそのきっかけをつくる、そういうことが必要ではないかというふうに思っております。

そういう意味で、この観光というものを新たな取り組みとして世界に、あるいは全国に発信していくということが大変有意義ではないかというふうに思っております。この観光を推進していくということは、日本全国から、あるいは世界から訪れるたくさんの方をお招きをして、そして千代田区を楽しんでもらう。そういうことは、とどのつまり、雇用の創出だとか、あるいは産業の振興、地域の活性化、こういったものに直結していくのではないかというふうに思っております。

幸いこの千代田区は、江戸文化発祥の地として、たくさんの文化資源を抱え、観光資源を抱えております。とりわけ、最近の観光の目的を統計学的に押さえてみますと、従来型のいわゆる文化資源を見学するという見学型の観光から、今や、食文化を楽しんだり、あるいはその地域の方々と交流をしたり、体験をしたり、そういう体験型・交流型に変わっ

てきている。

観光の目的で一番高いのは、最近ではグルメだそうでございます。千代田区は江戸文化発祥の地として、いろんな文化的な資源があると同時に、そういうグルメを楽しむといったような、あるいはお買い物を楽しむ、こういった資源というものも別にたくさんあるわけでございます。この観光資源というのは、千代田区から掘り起こしますと、もう数限りなく存在をする。

残念ながら、これまでそういう観光資源を統合して、全国に発信していく、千代田区の魅力を発信していくというふうなことに、若干力不足だったのではないかというふうに思っております。

そういう意味で、議会も含めて、千代田区のこれからの元気を取り戻すために何をすべきか。数多い観光資源を活用して、そして、たくさんの方に千代田区を訪れてもらう。そのことが地域活性化だとか、あるいは雇用創出だとか、そういったものにつながっていくと、大変元気を回復できるのではないか。そういう意味で、きょう、連合町会並びに区議会の皆さんで構成する区民集会運営協議会が企画されました「景観と観光に関するシンポジウム」、この企画は大変時宜を得た有意義な会ではないかというふうに思っております。

徳川さんの江戸文化の歴史、そういった基調講演に続き、著名な先生方によるパネルディスカッション、こういう企画がされております。大変時宜を得た、参考になる催しではないかというふうに思います。ぜひ、この会が成功裏に、また皆さん方のこれからの観光という視点からの生活、こういったものにつながっていけば、大変ありがたいというふうに思っております。

この会が成功裏に終了することをご期待申し上げまして、簡単でございますがごあいさつにかえさせていただきます。本日は大変ご苦労さまでございます。（拍手）

第1部 司会 ありがとうございます。

ここで、本日のシンポジウムを主催しております、先ほど副区長さんのほうから言葉がございましたけれども、区民集会運営協議会のメンバーの中から、連合町会長さんの皆さんをご紹介させていただきます。

各連合町会長さん、ちょっとご起立をお願いしたいと思います。どうぞ、そちらに向いてひとつ。

よろしく願いを申し上げます。（拍手）

詳しくは、先ほど申し上げましたしおりの2ページに説明が書いてございますので、またこれをご参照していただければと、こう思っております。よろしく願いを申し上げます。ありがとうございました。

本日は、休憩を挟みまして、2回の講演がございます。大変長時間にわたると思います。もし、この中でご気分がすぐれない方がいらっしゃいましたら、大変申しわけございません、近くにこういった腕章をつけているスタッフの方々がおられますので、ぜひ遠慮なく申し出ただいただければと思っております。

それでは、第1部の基調講演でございますけれども、講師の方のプロフィールを簡単にご紹介をさせていただきたいと思っております。お手数ですがけれども、お手元の区民集会のしおり9ページをごらんいただければと思っております。よろしくどうぞ。

本日の講師をお願いしております徳川恒孝様は、幕府を江戸に開き、江戸400年の礎

を築られました徳川家康公の末裔でございまして、徳川宗家18代当主でございます。明治維新後、徳川家は華族に列し、公爵を授けられて徳川公爵家となり、貴族院の議長などを歴任されてまいりました。

徳川恒孝様は、18代当主として、平成15年に財団法人徳川記念財団を設立し、徳川家の貴重な遺産の管理に努めておられ、江戸時代の真実とその大なる魅力を紹介をいたしました『江戸の遺伝子』などの著書も出版されております。

本日は、「江戸時代の武士と庶民、そして現代社会」をテーマにご講演いただきます。

それでは、徳川恒孝様、よろしくお願いを申し上げます。（拍手）

徳川氏 皆様、こんばんは。ただいまご紹介いただきました徳川でございます。

これでマイク、よろしゅうございますね。後ろのほうの方も。少し声が小さいですか。大丈夫かしら。よろしいですか。では、これでお話をいたします。

きょうは、こんな僕は大きな、大変な大会であるとは思いませんで、こんなにたくさん皆様が来ておられるので、ちょっとびっくりしております。

私は長い間日本郵船という会社に勤めておりましたものですから、昭和39年から45年、千代田区丸の内2-1-5だったかな、日本郵船にずっと勤めておりました。お昼御飯は丸ビルか東京海上の地下で食べるという生活を延々と続けてまいりましたので、昼休みは、大体、皇居前のところへ行きます。最近だんだんたばこが吸えなくなってきて、ますますいろんなところへこそそと行く機会がふえているんですが（笑）、ここ3年ほど、もう日本郵船へ通わなくなりましたので、ちょっと千代田区にはごぶさたをしております。

きょうは、さっき申し上げた江戸の武士社会それから現代という題で、特に千代田区の観光に直接関係のある話とは少しずれてしまうんですけども、背景説明のようなことで、少し江戸時代のお話をしたいと思います。

江戸時代というのは、特に戦後、非常に暗い、悪い時代であったというふうに習ってまいりました。私も変な家に養子に来たもんだとつくづく思ったもんなんですが（笑）、最近大分風向きが変わってまいりまして、それほどひどくもなかったんじゃないかということになってまいりました。私はその最先鋒におりますもんですから、ちょっとえこひいきみかもしれません。その点は差し引いてお聞きいただきたいと思います。

レジュメの一番最初にちょっと、外国人が見た戦国時代と江戸時代の違いということを書いてみました。一番上に書いてございます文章を書きましたのは、ロドリゲスというポルトガル人の宣教師でございます。彼は1560年ぐらいに来まして、1610年ぐらまで、約50年間日本で暮らした宣教師ですけども、彼が書いた日本の戦国時代というのは、こういうふうな時代でございました。「土地は全て耕作されることもなく、また耕作されていたところは種を蒔いたままで荒らされ、敵方や隣人によって強奪され、絶えず互いに殺しあった。日本全体は極度の貧窮と悲惨に陥った。商取引についても法も統治も無く、各自が勝手に殺したり、罰したり、国外に追放したり財産を没収したりした」。

戦国時代というのは、この時代がないと、NHKの大河ドラマというものは存在し得なかったと言われるぐらい、まあ戦国時代はおもしろい時代でございまして、黒澤明さんも大好きだったでしょうし、皆様、大変ドラマチックな時代で、お侍たち、武将たちの英雄の物語もあれば、悲劇の物語もある。おれはやっぱり真田が好きだとか、どうも家康は気に入らないとか（笑）、いろんな方がおられるんですね。それは劇の上で大変すばらしい

んですけれども、国の中で150年も戦が続いているというのは、端的に言えばどういうことだというのが、まさにこのロドリゲスさんが書いたようなことだったんだろうと思います。

次に書きましたのが、これは江戸時代に入って約80年たちましたところ、だからちょうど前の文章から約100年たったところなんですけど、ドイツ人のケンペルというお医者様が長崎のオランダ屋敷に来て、2回、参府道中で江戸に来て、実は將軍の脈をとって健康診断なんかもしているんですけれども、この方が書いた日本というのは、こういうふうになりました。「この国の民は習俗、道徳、技芸、立ち居振舞いの点で世界のどの国にも立ち勝り、国内交易は繁盛し、肥沃な田畑に恵まれ、頑健強壯な肉体と豪胆な気性を持ち、生活必需品は有り余る程に豊富であり、国内には不断の平和が続き、かくて世界でも稀に見る程の幸福な国民である」。

ですから、この2人の、非常に頭脳的に高いスタンダードにあったイエズス会の大司教とそれからドイツのドクター、ちょうど100年間隔で日本に来て書いた文章がこれだけ違うんですね。ですから、いかに戦が続いているということが悲惨であったかということは、よくわかりいただけるんだろうと思うんです。

太閤様が朝鮮に出兵していたときに、何回も何回も五大老というのを集めまして、年貢のこと七公三民たるべしと、こう言われるんですね。つまり、お米ができれば、7割をとりなさい、3割を民に残しなさいと。これをみんなに強制するんです。ですから、五大老筆頭だった家康も、前田さんも、皆、イエス・サーと。少しぼけぎみなものですから、また同じことを言うんです。また、イエス・サーと。7公3民なんです、戦争時代というのは。

これが、後でちょっと申しますけれども、元禄時代に入る前、1670年ぐらいには、実はこれが3公7民に変わります。つまり、お米の取れ高の3割を税金としてとって、7割は民に残る。

どうしてこんなことが起こるのか。いろんなことがあって、後でまたお話しいたしますけれども、実は戦というのは、けたたましく金がかかります。これは明治以降を見ましても、これは、こういう数字がたまたまあったのでお話をいたしますと、日本の国家予算の中で軍事費が占める割合というのがずっと出ているのがありまして、明治の20年からの数字なんですけど、大体、戦のない年は25から30%ぐらいが大日本帝国の軍事費でした。これが明治27年、28年の日清戦争のときは、数字が69.2%と65.5%に上がりました。それから、10年後の明治37年、38年は、何と国家総予算の中の軍事費が81.8%と82.3%です。ですから、国家予算の5分の4以上が軍の費用、戦の費用に使われたわけですね。

それから、昭和12年から20年まで、これはちょっと数字だけ読んでみますと、69.0%、76.8、73.4、72.5、75.7、77.0、78.5、85.5、これが昭和19年です。昭和20年が44.8%になりました。

ここで申し上げたかったのは、長い間戦が続いているという場合に、どのぐらい国の富、国家総予算というか、それが実は使われたか。約7割が戦に使われた。昭和12年から、もう、70%の国家予算が軍費だったんですね。ですから、太平洋戦争が始まる2年前から、ぜいたくは敵だとか、貴金属の献納とかということが始まりましたわけで、よくまあそ

の状況で太平洋戦争に突っ込むという決断をしたもんだとつくづく思いますけれども、戦というのはそういうものだというふうにお考えください。

この戦が、1600年ではたっとなくなりました。あとは大坂の陣もありますし、島原というのもありますけれども、全国的な大戦争という意味では、事実上なくなった。

17世紀、1600年から、日本という国は、あとずっと戦争なしで来て、ここで国が戦争の体制から平和の体制にがらっと変わってくるんですね。こういうことが世界の中で起こったのは、本当に日本だけです。

この1600年から1700年まで、ヨーロッパは有名な30年戦争というのから始まりまして、100年間の中で戦がなかったのは6年だけ。つまり100年のうち94年、ヨーロッパはどこかで戦争がある。最初の30年戦争というのは、ヨーロッパ全部を巻き込んだ戦争です。ですから、東ヨーロッパは大体人口が3割減ったと言われておりますけれども、そういう戦争だった。

中南米では、メキシコとペルーにあった二つの大文明がこっぴみじんになって、その前の世紀の半ばからですけれども、人口が約7割減ったと言われております。

中国はちょうど明から清に変わったのがこの一世紀でございます、北京のところはぼろっとすぐ変わっちゃったんですが、その後、中国全土ですっと南まで戦争が約六、七十年続きました。

インドも、前の政府に対してムガル人というのがアフガニスタンから入ってくる。このムガルというのはモンゴルということですから、ジンギスカンの子孫なんですが、これがインドの征服王朝になります。これもインドじゅう、ずっと戦争が続いている。

ですから、17世紀の世界を見ますと、大変な大戦争が続いているわけですね。これは、大航海時代という言い方もありますけれども、もう一つの言い方は第1次グローバルイゼーションという言葉も使いますが、いよいよそれぞれの孤立していた文化が、文明が、お互いにぶつかり合って、激しい戦争になって広がっていった。

世界じゅうがそういう中で、日本だけがぼこっと平和に切りかわったんですね。最初の100年で何が起こったかということはこの1に書きましたけれども、まず巨大なインフラの整備が進みました。一番大きかったのは治水工事だと思います。関東平野の東半分は、ほとんど沼地だったんですね。例えば今の草加市とか、ああいうあの辺は全部沼で、葦原です。なぜそうかといえ、利根川という川が真っすぐ東京湾におりてきてまして、これ、大きな川で、律儀に毎年大洪水を起こすんです。それで始まったのが利根川の東遷、東に移すという、京都から遷都するという、あの「遷」なんですが、という大工事がありまして、これが17世紀の中ごろにおりてきて、東京湾に行かないで、ぎゅっとこっちへ行行って、犬吠埼のところまで太平洋に注ぐようになる。そのことによって関東平野のすごい大きな部分が田畑に生まれ変わってくるわけですね。同じようなことが濃尾平野でも行われ、越後平野でも行われ、河川の大工事が実は起こったのがこの17世紀です。

よくエンジニアの方は、17世紀を日本のシビルエンジニアの時代というふうに言われますけれども、まさに日本という国の今ある形が急速に進んでできたのが、この1600年から1700年までの100年間でした。

そのほかに、日本じゅう街道が行き渡ったとか、貨幣が全部行き渡った。法律が全国で統一されます。それから、度量衡も日本じゅう統一されました。これは何か不思議に思わ

れるかもしれませんが、実は島津さんのところの1升と前田さんのところの1升は、必ずしも同じ1升じゃないわけですね。津軽さんのところの1尺というのは何とかの1尺と違うとか、要すれば微妙に全部重さが違ってました。それで、重さとか、度量衡が違ふということが、これ、ビジネス上は大変まずいことでありまして、これが統一していないと、全国的な商いはできないわけです。ですから、度量衡が決まったとか、貨幣体系が決まったとか、法律が全部決まったということは、日本のこれは飛躍的な発展のベースになったわけです。

そして、大文教政策が進みます。今まではとにかく人を殺してりゃよかったお侍が、後でちょっと述べますけれども、政治家に切りかわっていくわけですから、ここでお武家様たちの大勉強が始まったわけですね。そして大都市が出現します。その大都市というのがこの江戸のことでありまして、約100年間で、江戸のまちは100万近い 正確に言うとうと、人口が85万ぐらいまで一気に膨らんだんですね。半分がお武家様で、半分が町人だった。1720年ぐらいになると、完全に100万を突破しました。ただ、この中には、参勤交代で来ている武家もいますから、必ずしもここに住みついているわけではないんですが、毎年毎年半分ずつ侍が行ったり来たりしてました。常にその人数が同じぐらいですから、これは人口に入っていきますが、そういう大都市になりました。

ですから、1700年というところで切ってみますと、江戸というのは恐らく世界最大の都市です。恐らくといえますのは、ロンドン、パリはまだ35万とかそんなものだし、ニューヨークは2000人ぐらいですから問題にならないとして、北京がわからないんです。北京というか中国というところは、偉い人の人数はわかってても、人民が一体何人いるかということは、いまだにあの国はよくわかっていないんですが(笑)、北京も今わかっていない。もしかしたら多かったかもしれないし、少なかったかもしれない。ということで、世界最大級というふうに言えますけれど、まあ最大の都市になっていたのが江戸だと思います。

ここで、さっき申し上げた、いわゆる平和の果実として、7公3民であった年貢が3公7民になる。そして人口が、太閤秀吉公が出兵しておられたころは、日本の人口が大体1,200万と言われていたのが、大体3,000万に伸びます。つまり、100年間で人口が2.5倍にふえました。

ここで、ですから平和の果実というのは何なんだと。ぱーっと、こう、経済が進む、人口がふえる、新田開発が進むということで、一気にここで日本の大衆文化が進みました。これは元禄時代と言います。このにぎやかさは、大体、大阪が中心になって、大阪の次に江戸になるわけですが、お芝居が出てくる、浄瑠璃が出てくる、歌舞音曲、文芸、近松門左衛門がいる、松尾芭蕉が何かその辺をてくてく歩いている、絵描きがたくさん出てくる、工芸があって、もう、女性たちの衣装はけんらん豪華。旅行がはやってきますので、みんな物見遊山の旅行が出てくる。

庶民が物見遊山をする歴史というのは、日本は圧倒的に早いんですね。このころから始まりまして、江戸期の末に向かって、まあ、皆様、グループをつくって、ちょっと江ノ島へ行こうとか、お伊勢様に行こうとか、大変な、町内がそろってそういうことをするという大娯楽になりますけれども、西洋の人たちがそういう形で娯楽のために旅をするって、19世紀に入って大分たってからなんですね。ですから、いかに日本が、街道がよく

できて、宿屋がちゃんとできて、安全だったかということが大変クリアになるんですけども、そういう時代になりました。

そういたしますと、この3のところに入りますけど、お武家様が、何しろ今まで戦が強ければよかったのが、政治家になるわけですから、そう、お武家様というのはがらっと勉強が変わってきます。この2のところを書きましたのが、室鳩巢という方の書いたあるべき武家なんですけれども、ちょっと読んでみますと、「心に偽りを言わず、身を私に構えず、心素直にして外に飾りなく、作法を乱さず、礼儀正しく、上に諂わず、下に驕らず、己が約束を違えず、人の艱難を見捨てず、さて恥を知りて首を刎ねられるとも、己がすまじきことはせず、死すべき場をば一足も引かず、常に義理を重んじてその心鉄石のごとく、また温和慈愛にして物のあはれを知り、人に情け有るを節義の士と申し候」。

これは一種の理想の人物像であったわけで、この『名君家訓』という本は、当時のベストベストセラーなんですね。武士たちが非常に愛読をした本です。ですから、一応こういうものが僕らの理想像だねということはみんなに行き渡っていたんだと思うんですね。こういう人たちが上に立っていた。

そして、大変に日本の江戸時代を特徴的にするのが、この3番目にございます世界一の教育水準ということですよ。

ここに書きましたように、お武家様の藩校というのが、これは幕末には250校ぐらいになります。正式な藩校というのはもう少し遅くできてくるのもあるんですけども、いずれにしても、各藩全部儒者を置いて勉強をしておりました。

それから、寺子屋というのは、全国で約4万軒ありました。ちょっと、教育のことがとても大事なもんですから、少し寺子屋のお話をいたします。

今の学校と寺子屋が何が違うかと申しますと、義務教育じゃございませんから、同じ年に、4月1日に入ってくるわけじゃございません。ですから、ご両親がお母様が連れて、寺子屋の先生のところに行って、この子の教育を引き受けてくださいと。それで、わかった、引き受けましょうと。ですから、教育の師弟の関係というのは、あくまで1対1なんですね。学年があるわけじゃなし、学級があるわけじゃなし。

当時の先生方が書いた教育論みたいなものが、実は3年、もう4年前になりますか、両国の江戸博で「江戸の学び」という展覧会がございました。そのときに、いろんな寺子屋の先生の書いた教育論が出てくるんですが、異口同音、一人残らず、子どもたちというのは一人一人全部性格が違う、したがって教育も全部一人一人する。ここで、今の教育と100%、実は違うことなんですね。先生方が書いておられるのは、子どもによって、もう5歳、6歳で目を輝かして学問をする子もいれば、15分座っていると体が動き出しちゃって、もうどうにもならない子どももいるし、五、六歳だと、ぼーっとしている子どももいるし、まあ一人一人全部違いますねと。ところが、それが育っていくと、ぼーっとしていた子がにわかに勉強が好きになったり、どんどん、一日一日、子どもって変わっていくんだと。だから教育は一人一人やりますと、こういうことになります。

一人一人にそれぞれ一番いい教育をする。これは、この子が大人になって大工さんになるのか、大人になって八百屋さんになるのか。大人になって何になるのか。船頭さんになるのか、漁師になるのか、おけ屋さんになるのか、これで全部教科書が違うんですね。

例えば、ご商売に入るところの子どもであれば、将来、商売に使う言葉、いわゆる語彙、

ボキャブラリーですね、それを教えていく。商いのために必要な言葉、例えば土地の名前とか東海道五十三次から始まって、最後は受け取りの書き方とか、そういうところまで行くんです。大工さんのお子さんですと、これは材木の種類とか、使う道具とか、何とか式とか、いろんなことを習うわけです。おけ屋さんはおけ屋さんで、また、その専門用語を習っていくんですね。要すれば、職場についたときに、その職に耐え得る字の読み書きと基礎知識、これをある意味で教えていきますから、実学の世界。

それで、教科書が、全部で、日本じゅうで7,000種ぐらいあった。ですから、一人一人違うものが与えられていくんですね。「いろは」は一緒にやるんですが、その教科書を書いているのが、十返舎一九とか滝沢馬琴とかいう人が書いていて、絵を描いていたのが葛飾北斎だったり。社会を挙げて実はそういうものをつくっていくんですけども、そういう教育を受けました。

ここに、「厳しい先生・父親と「謝り役」」と書きました。僕は江戸の教育の本を読んでいたたりなんかして一番おもしろいなあと思いましたのは、親・先生が、子どもがいたずらをしたり悪いことをしたときにかなり厳しくしかるんですけども、必ずその前に謝り役というやつが周りにいることを見てからしかるんですね。なぜ、僕はそんなことがわかったかという、ある寺子屋の先生が、最近うちの子どもたちはとても悪い。あしたしかるから、隣の家のおばあさんに、適当な時期に謝り役で来てくれるかと言って、はいはい、わかりましたというので、適当なときに来るんですよ。

これのいいところというのは、子どもたちも、みんな胸に覚えがあるわけですね、しかられるべきことの。それをこてんぱんにやられれば随分厳しいんですが、そこへお隣のおばあちゃまなり、親戚のおじさんなり、お隣のご隠居のおじいちゃんなりが出てきて、いやあ先生またはお父さん、それはこの子が悪かった、私と一緒に謝りましょう。ただ、この子はね、実は、先生は見えていないだろうけれども、この前あそこで転んで泣いている子どもを助けて、とてもいい子なんだと。いいことを、その謝り役がたくさん言うんですね。それを聞いて、おやじなり先生なりが、そうか、じゃあ今回は許す。決して今後こういうことをしないようにと。これがおしかりのプロセスだったというふうに考えてもいいんですね。これは、僕、うまい方法だなあと思います。

悪いことをすればしかられる。けども、違う人が自分のいいところも見ていて、褒めてくれる。で、一緒になって謝ってくれる。それで許される。このプロセスが、実にその子どもたちと社会ということで、いいことをすれば社会で褒められるし、悪いことをすれば社会でしかられると。単におやじと息子の1対1のらみ合いということではないのが行われました。ですから、ちょっとこういうのを見ていまして、実に洗練されているなあという感じは強かったです。

次に、ちょっと時間がないのでどんどん先へ進んでしまうんですが、18世紀に入りまして、最初の100年間、さっき申し上げたように、戦争が終わった、人口が2.5倍にふえた、大土木工事で田畑がふえた。ぎゅーっと上って華やかな元禄時代が来たわけですね。そこから景気が、こう、横ばいから少し薄ら寒い景気に下がるんですね。これは何かといいますと、いわゆるそれだけ大開発が起こった後で、もう日本でつくれる資源、お米とか、そういうものがかなりぎりぎりいっぱいになっちゃった。人口もぎりぎりいっぱいのところまで来た。したがって、これ以上養えないという限界に来たのが、恐らく173

0年ぐらいだろうと思うんですね。ですから、ここで、それまでのいわゆるバブル景気で上がってきて、もう、元禄時代でピークに達した日本の景気が横ばいになっちゃう。不景気になる。

そのとき出てきたのが吉宗という将軍でありまして、彼はいろんなことをやりました。彼は非常によくわかっていたと思うのは、日本じゅうの人口調査をやったり、日本の総資源調査をやったり、幕府の、それまでは石高別で老中とか奉行になったのを全部能力別に切りかえるとか、いろんなことをやりました。

あげくの果てに、彼がいろんなことを調べた結果やったことは、大節約というか、質素儉約令なんですね。つまり、バブルというのは、大きくて高く、きんきらして、金がかかることがいいことなんですよ。皆様、覚えていらっしゃるかどうか、もう30年ぐらい前のテレビで、「大きいことはいいことだ」というコマーシャルがあったんですね。あれはもう僕はバブルの象徴だと思ってあのころから聞いていましたけれども、まさにそういうピークから、行きどころがなくなって景気が下がってきて、吉宗がやったのが大儉約令です。

それまでは、例えば吉原で、京都でもいいし、島原でもいいんですが、一晩千両使ったとか、そういうのが、いやあ豪気なもんだと、こう褒めそやされていたのが、その手の豪商たちは、ばたばたばたばたと、ある者は取りつぶし、ある者はすごい課税をかけられたりして倒れていきます。その後残ってきた商いの方たちが、今でいう、ある意味での日本の商い道徳をしっかり持った方たちですね。近江商人の「三方よし」であるとか、そういう非常にまじめな産業だけが、お店だけが、実は生き残って出てきます。

もう一つおもしろいなと思ったのは、この吉宗公という方が公園をつくったりするんです。景気が悪くなっちゃうと、みんな、何か暗くなっちゃうんですよ。それで江戸城にあった桜を、1,200本だか何だか飛鳥山に持って行って植える。隅田川堤を全部桜にする。中野に桃畑をつくる。品川の御殿山にも桜を植える。ですから、江戸じゅうの人が狂ったようにお花見だ、お花見だといって、お酒を持ってドンチャンいくというのは、大体このときから始まっているんです。

僕は、毎朝、明治神宮と代々木公園を歩いているんですが、ことしも桜のときに行きましたら、もう朝6時40分ぐらいから、皆様、ターポリンを敷いて、坊やたちが、一番若い恐らくサラリーマンが場所取りしています。僕も、昭和39年、やりました。靖国神社に場所取りに行かされました。どうせおまえはいたって何の役にも立たないんだから、ターポリンを持って早く行っておいでと言われて、行って(笑)、一日じゅう座っていましたけど、まあ、この脈々たる伝統は大体このころできたんですね。

大変おもしろいのは、日本の趣味の中で、実に金のかからない趣味というのはたくさんあるんですよ。まず俳句をつくるとか川柳をつくる、これはほとんど金がかからない。これが大ブームになったのはこの時期なんですね。「六玉川」という付句ができたり。それから吉宗公が進めてやったのが、例えば朝顔のコンテストである。菊のコンテストである。それから、寄席がやたらあちこちにできました。食べ物はファストフードです。おすしとてんぷらとそばが、各まちまちにできてきた。つまり、金がかからなくて楽しめることが大変ふえました。

女性たちの着物も、恐らくすそは何尺も 大体の今の和服の形になったのがこのころ

です。それまでは、さすがこういうふうになっていましたし、大変な、その上にもう一つ着たりですね。それがなくなってきた。

ですから、ここで恐らく、今僕たちが日本文化と言っているものが固まってきたんですね。これは、けんらん豪華を過ぎちゃった後なんですよ。質素儉約に入ってからいろんなものが固まって、それが今につながっているとお考えいただいたらいいと思うんです。

僕はちょうどことし70で、去年までは日本郵船の顧問ということで、まだ幾らかお給料をいただいた。それもすっかりなくなっちゃって、困ったなあと思っているんですが、大体僕の同級生たちというか仲間たち、ニューヨークで一緒にいたとか、大体みんな子会社もなくなって、顧問もなくなって、みんな貧乏ふうになってきたわけですね。そうすると、突然、月に3枚ぐらい、違うやつから、今月の僕の俳句、なんていうのが来るんですよ(笑)。それがみんな下手なんですよ(笑)、そんなこと言っちゃいけないですが、なかなかこれはいいんじゃないか、なんて言ってね。じゃあこれ、こっちが今月の僕の俳句なんていって、向こうはまた、これは下手だなと、向こうはきっと思っているんでしょうが、なかなかいいんじゃないかと。これ、全然金がかからなくて、大変おもしろいんですね。ゴルフに行くより、ずっと安いですよ。

こういう娯楽が中心になってくる。ここで、ですからさっき申し上げたように、日本がけばけばしいところから、ぎゅーっと変わって今まで来ているということ、ちょっと覚えておいていただきたいなと思うんです。

もう一つ、この時期から始まったのが、徹底的なりサイクルです。江戸のまちの、日本橋の絵が入ってありましたかしら、その中に。ちょっとそれを見ていただきたいんですが、これは魚河岸ですから、手前は。魚がいて、人がてんびん棒を担いでいるのは、一心太助のひ孫みたいな人が魚屋で駆け出していくのはよろしいんですが、向こうの通りを見ていただきましても、てんびん棒で前に箱やおけを持っている人がたくさんいます。当時の江戸の、庶民でいう町人の商流のこれが最先端ですね。このぼてふりで歩いている。魚も売りゃあ、やっちゃばから野菜も来ますし、豆腐も来るし、煮豆屋とって、もう味のついたお総菜も売りに来ます。ですから、長屋のおかみさんたちは皆これを買うわけですが、でも、てんびん棒を担いでこうやって歩いている人の7割は物を売るほうなんですが、3割は買うほうでした。もう、ありとあらゆる物がリサイクルで買われてきました。紙は、どんな紙っ切れでも持ってきました。それからきれも、このぐらいの大きさのきれだったら、まあ1文なのか何なのか知りませんが、持ってきました。げたの割れたのとか木くずは全部拾ってきました。

ろうそくが燃え尽きますと、このぐらいろうがろうそく立てに残るんですが、それも買いに来ました。ろうの流れ買いと言うんですけど。髪結いのこの髪の毛も買いに来ました。これは、女性たちがみんな日本髪ですから、かもしになったんだと思いますね。生ごみも持って行ってくれました。きょうは月曜日ですから資源ごみの日ですとかね、水曜日ですから生ごみですとかね、そういうことは一切なしです。ちゃんと向こうが持って行ってくれる。

なぜそんなことができたかといえ、ごみ屋さんは、永代島とかあいうところに自分の捨てる場所があって、海が汚れないようにくいを打って、そこに捨てるわけですね。ひいじいさんが始めて、じいさんがやって、おやじがやって、息子がやって、孫がやるぐら

いになりますと、その部分がいっぱいになりますから、またくいを打って先へ行く。またくいを打って先に行く。そうすると、この5分の1ぐらいの土地が島にできてくるわけです、埋立地が。それがそのごみ屋さんの私有地になるんですよ。そうすると、江戸のまちというのは、土地持ちになるのは大変なことですから、4代、5代、一生懸命にやりますと、私有地ができてくる。ですから、一生懸命やるわけですね。何代も同じ仕事をやるということのメリットは、実はそういうところにもあると思うんですが、そういう形で実は完全なリサイクル社会になりました。

ここに「質素儉約」と書きましたけれども、今の日本が忘れちゃっているようなことが、当時の人にとっては常識なんですね。つまり、山に木がしっかりあるから、水が栄養豊かで、淡水魚がたくさん生まれて、そのきれいな川が今度は田んぼやなんかからまた養分をもらって海に来るから、またそこが魚がわいてくる。そんなことが、全員が知っている当たり前のことでありました。ですから、さっき申し上げた寺子屋で、「山は高さがゆえに尊からず、木あるをもって尊しとなす」。ちょうど聖徳太子様の平和の話をもじっているわけですが、そういうことを六、七歳からたたき込まれていきます。さっき言ったように、社会全体が子どもを支えていくと、こんなことで進んでいたことになります。

最後に、5番のところでございますが、江戸の景観です。1850年、開国をしてから続々といろんな人が横浜からこの江戸にやってまいります。そして、彼らがほとんど異口同音に言ったのが、江戸というのは世界一美しいまちである。庭園都市であるということ、全く、パリとかロンドンとかベルリンとかいうのと、都市のコンセプトが違う。最初来たときはがっかりするんですね。江戸が世界一のまちだと思ってやってくると、2階屋の家がずっとあって、森があってね。お城はどーんとある。だけど、江戸城はもう天守閣がないですから、五重の塔があって、五重の塔がある。彼らが期待していた世界最大の都市に、セントポール寺院であるとか、ウェストミンスターであるとか、ルーブルであるとか、凱旋門とか、そういうけんらん豪華なものがないんですね。

最初は、何だこれはと思うんですが、1週間おり、10日おり、一月いるうちに、この都市は西洋の大都市と全く違うコンセプトでできた都市だと。つまり、田園と都市が完全に一つの中でミックスしちゃっている都市だ。初めてコンセプトが違うということがわかって、結果としては、今申し上げたように世界で一番美しい都市であると。

ある方が、「木立ちに恵まれた風景の美観と、周辺の絵のような眺めという点では、江戸は西洋諸国のあらゆる都市を凌駕している」というふうに書いています。こういう褒め言葉がたくさんあります。

これはなぜかという、これ、日本の中でも江戸だけです。つまり、お大名の上屋敷、中屋敷、下屋敷に皆それぞれ庭園がありまして、それで神社仏閣も大きな庭園がありますから、実は町方の方が住んでおられたのは、江戸の朱引き内の中で、約15%から17、8%のところ町人は住んでいたんです。残りは全部お大名の屋敷か寺院か何とかですから、まさに田園都市なんですね。それも、割とミックスしていますでしょ、江戸の地図を見ていただきますと。だから、ここが例えば一つの繁華なところがあって、ずっと外れると両側が森林で、また抜けるとまた繁華なところがある。まちが物すごくきれいだということを彼らは大変に絶賛しています。

それから、夏は打ち水をする。それから、全く何にも言わなくても、人が左側を歩いて

いる。日本じゅう、左側交通だ。これが西洋人がびっくりしているんですね。かごとかがすれ違うときも左側、馬に乗ったお武家さんがすれ違うときも左側。

ヨーロッパは馬車のまちですから、しょっちゅう交通事故が起こるわけですが、右、左という規制が全くなかったんですね、当時。日本は、馬車が全くないんです。つまり、幕府は、江戸のまちというのは人が歩くまちだから、人間が押したり引いたりする大八車はいいですよ。けども、馬や牛が引く馬車は、みんな街道の入り口でとめちゃいます。ですから、その絵を見ていただくとわかるんですが、江戸の中の物流というのは、99%、川です。その狭い日本橋川を見ていただくと、まあ、よせばいいのにとと思うほどたくさん船がいるわけですが（笑）、全部、ほぼ全部海上で物流が動きました。ですから、その図面にあります向こう岸にある白い蔵が今の営業倉庫ですけれども、入り口は全部川に向けて、棧橋で出している。そんなふうなことでありました。

ということで、まだちょっとお話ししたいこともあったんですけれども、江戸のまちというのが、かつてそういうまちでありましたと。そういう教育がありましたと。その中から、江戸の文明というのができてきて、恐らく千代田区と中央区と、あと上野がいわいぐらいしか、実は本当の江戸の方というのは、もうおられないんですね。ですから、ぜひ、江戸前の江戸前というのはとてもいいことでありまして、江戸っ子の江戸しぐさという、越川先生なんかは言うておられますけど、あれはどういうことかといいますと、日本じゅうのまちの中で、つまり、外国人の部分が3割ある国って、ないんですよ。外国人というのはドイツ人とかオランダ人だと思わないでください。出羽の国とか薩摩の国とか、何とかの国とかね。要すれば、日本の地方地方の国から来た人が常に江戸に住んでいる人の3割ぐらいなんです。これは一大国際都市なんですね。

大体、お国の人に来て、言葉が通じないんですね。津軽さんのところのお侍と細川さんのところのお侍が江戸でお話をしようと思っても、江戸詰めの人がない限り絶対通じないですよ。だから、その意味では、江戸の市民というのは、260年間、常に人口の3割ぐらいは、言葉が違う、習慣が違う、性質が違う。こういう人が常に3割ぐらいいるわけですから、江戸というのは、恐らく世界的にも最大級の国際都市だったんですね。国際と言うと、すぐ、中国人が来られて国際人じゃないようですけども、当時の感覚で言えば、大国際都市でした。

ですから、その国際都市であるがゆえに育ってきた江戸っ子かたぎとか、江戸っ子の江戸しぐさとか、江戸の、ずっと人を助けたりね、そういう一つの文化が育ってきたのもやっぱり国際都市のためであっただろうというふうに思っております。

ということで、ちょっと僕は3分ほど時間を過ぎてしまいましたので、ここで私の話を終わりますけれども、ますます、皆様、千代田区を愛していただいて、江戸城 江戸城は、天守閣はつくるのがなかなか難しそうなんですけど、もうちょっと僕にお金があればいいんですけど、一つだけ、僕が思っているのは、江戸城の旧本丸跡ですね。1カ所だけ、松の廊下の跡というくいが一本立っているんですね。あれだけじゃなくて、僕は、本当は、お金がかからないように、石とコンクリートと草でもって、ここが白書院、ここが何とか、ここが大奥で、ここから渡ったんだとかね、そういう図面をあそこにびしっとつくって、それぞれの区切りのところに草でも植えてくれれば、ほとんど金がかからないで、大奥ってどんなものだったかということがよくわかるんだと思うんですね。

将軍が中奥で寝ているところからトイレまで、随分遠いんですよ。若い将軍はいいですけど、家斉公みたいに60、70になってきますと、夜中に小便にしょっちゅう行きたくなるだろうし、起き上がって「御用」と言うと、すぐお小姓が出てきて、ぱっとうやっで光をつけて、それからてくてくてくてくてく歩くんですね。その小便している間こうやっている人もかわいそうだけれども（笑）、などということがわかるようになるのは、そういうことができたらいいなと思っております。

どうも、最後はばかばかしい話になりましたけれども（笑）、ご清聴ありがとうございました。（拍手）

第1部 司会 長時間にわたりまして、本当に熱心なご講義をありがとうございました。会場の皆さん、いかがだったでしょうか。改めて最後にまた徳川さんにもう一度盛大な拍手をよろしくお願い申し上げたいと思います。（拍手）

ありがとうございました。それでは、第1部の講演をここで終了させていただきます。

私の司会はここまででございまして、第2部からは、堀田康彦千代田区観光協会副会長、東京商工会議所千代田支部長が担当いたしますので、よろしくお祈りを申し上げたいと思います。

それでは、10分ほどの休憩とさせていただきますけれども、若干時間が延びた関係上、7時40分から再開となりますので、それまでに席にお戻りをいただければと思っております。

なお、本日、講師の方々が執筆されております著書が、受付の前、こちらから見て右側でしょうか、入り口におきまして販売をいたしております。この機会ぜひごらんいただき、よろしければ、お帰りにでも買い求めいただければと思っております。

本当にきょうはお疲れさまでございました。ありがとうございました。（拍手）

午後7時32分休憩

午後7時40分再開

第2部 司会（堀田千代田区観光協会副会長） 2部のパネルディスカッションに入ることにさせていただきます。

司会は、林会長からバトンタッチをいたしまして、私が担当させていただきます。改めて自己紹介を申し上げます。千代田区観光協会の副会長を務めております。また、東京商工会議所千代田支部会長も務めさせていただいております、堀田康彦でございます。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

大変立派な区民集会の冊子ができております。冒頭にパネリスト、コーディネーターのご紹介をすることになっておりますが、大変充実した冊子でございますので、内容についてはこれをゆっくりごらんいただきたいというふうに思います。随分立派な冊子をお金かけてつくっちゃったんだなと思ったら、中身が大変よろしいというふうに思います。お人柄まで紹介されているような冊子でございます。恐らく区民集会の実行委員の皆様が、優秀な事務局を督励してつくらせただろうというふうに思いますけれども、それでは、徳川恒孝様のご講演に続きまして、「江戸から現代、そして未来へ」、サブタイトルとして「千代田の魅力を再発見」というテーマでパネルディスカッションを始めさせていただきます。

まず、本日のコーディネーターをお願いしております青山侑さん。（拍手）

青山さんのプロフィールは、明治大学大学院の教授ということでございますが、長く東京都庁でお勤めになって、副知事も務められたということで、東京については非常に詳しい。また、小説家でもございますので、歴史・時代については非常に考察が深い方でございます。

次に、しおりの11ページには、高木茂さん。（拍手）

三菱地所相談役でございまして、よく私が三菱さんに悪口を言ったんですが、金曜の夜に丸の内まで倒れると月曜までだれも見えてくれないと言っていた世界のオフィス街が、今非常ににぎやかな場所に変貌してまいりましたが、その絵を描いておられたのは高木さんだというふうに伺っております。

次、しおりの12ページ、太田資暁さん。（拍手）

太田道灌公第18代目ということでございまして、くしくも第1部の講演の徳川さんも徳川18代ということですが、現在は江戸城再建を目指す会なども進めておられます。

最後になりましたが、唯一紅一点、山王テイ子さん。（拍手）

山王テイ子さんは中国の北京生まれということで、日中のかけ橋になるべく、国際交流コーディネーターとして活躍しておられます。

きょうはそういったテーマで進めていただきますので、限られた時間ですけれども、十分お聞き取りをいただきたいと思います。

なお、終わりの少しの時間をとりまして、質問の機会がもし時間的に余裕があればと思いますので、もしふだん気になっていることでお話の中で十分わからないと、あるいはこんなことを聞きたいということがあれば、簡潔にメモをとっておいていただいて、限られた時間ですから、どんどん積極的にご質問などをしていただければというふうに思います。

それでは、コーディネーターの青山先生、よろしく願いいたします。

青山氏 どうも、皆さん、こんばんは。パネルディスカッションの司会を務めさせていただき青山でございます。どうぞよろしく願いいたします。（拍手）

きょうは、千代田の景観と観光を考えるシンポジウムということで、パネルディスカッションのテーマは、「江戸から現代、そして未来へ～千代田の魅力を再発見～」と、そういうテーマになっております。時間が約60分ぐらいしかございませんので、まず最初に、私も含めて4人のこのパネラーから、それぞれ7分ずつで、このテーマに対して何を考えているかということについてお話をいたします。その後、若干4人の間でやりとりをしまして、それから最後に、場内の皆さんからの質疑を10分か15分お受けするというところで、すべての日程が9時までに終了という予定でありますので、どうぞよろしくご協力のほどをお願いいたします。

私、思うんですけど、このシンポジウムというのは、連合町会の皆さんと区議会の皆さんと一緒に実行委員会をつくられて開催されているということで、何かすごくいいですね、こういうのは。私、この前の講演会、区議会の議事堂でなされたときにもそう思ったんですけど、区議会の元議長さんやなんか、入り口やなんかで案内して誘導して下さっているんですね。すごく議員さんに対するイメージが、私、変わりました、千代田区議会のおかげで（笑）。それはまたなかならず、区議会だけではなくて、まちの皆さんとの間のそういういい関係ができているんだと、これが民主主義なんだと、私、そう思いました。そういう仕組みがうまく回っていると、きょうのこのテーマの千代田の観光振興

というのもうまくいくんじゃないかと、そう思います。そういう感想、印象を持ちながら、このシンポジウムを始めさせていただきたいと思います。

大変僭越なんですけど、まず最初の問題提起、私のほうから7分間させていただきます。前座ということでお許しをいただきたいと思います。

このテーマについて、私は、36年都庁に務めた立場から、自治体と観光事業ということでお話をさせていただきます。

まず、東京都に勤めていた立場から言うと、千代田は東京の中心であり日本の中心なんですけど、世界都市というのは、ロンドン、ニューヨーク、東京と、その3都市が一般には言われています。ほかにもいろいろ説がありますが、大体この三つが言われている。その中で、ロンドンは金融で食べている。ニューヨークは金融と観光で食べている。それから、東京は、金融、それからものづくりで特に特色がある、と。もちろん観光も少しはあるということだと思えます。

現代のキーワードというのは、やはり成熟社会ですから、楽しみがお金になるし、遠慮しないで私たちは楽しんでいいということだと思えますけど、その場合、観光は一つの柱になります。この観光という字は、もともと中国から来た言葉ですけれど、国の光 光は文化文明ですけど を観ると、そう書きます。ですから、単に見物して楽しいだけではなくて、それがビジネスとして、観光事業として成立するためには、そこに本質的な魅力がなければいけないということだと思えます。

もちろん、ミシュランってタイヤ屋さんなんですけど、いいかげんかなと思っていたら、東京を始めたら、星つきレストランがパリよりも、ロンドンよりも、ニューヨークよりも多いということで、いいかげんじゃなかったなと、そう思っているんですけど。

観光の基本は、やはりそのまちのストーリーだと思えます。

これは、きょう、年配の方も少しはいらっしゃるので。少しですけど(笑)。ですから、「シェルブールの雨傘」というのは私の世代は知っているんですけど、そうすると北フランスのシェルブールに行くんですね。それはやはり、そういうストーリーというのをすごく、大河ドラマもそうですけど、例えばミュンヘンの、これはニンフェンブルク宮殿ですけど、バロックがすごいというだけじゃなくて、そこにやはりヴィッテルスバッハ家の、このエリザベートがハプスブルグ家にお嫁さんで行くわけですけど、そういう人生ドラマとかストーリーがあるわけですね。

そういう意味で言うと、そのもとになったハプスブルグ家はウィーンにあるわけですけど、ハプスブルグ家は、またベルサイユ宮殿にも関係している。ですから、それぞれバロックで豪華なんですけど、そういう人生ドラマがあるので余計人々が観光に行くということだと思えます。

これは、スペインのマドリッドにある絵ですけど、これもハプスブルグ家にお嫁さんに行った王女マルガリータですよ。

そのスペインにはピカソがあります。

早過ぎますかね。7分でやりますから。すみません(笑)。

次が、同じスペインのビルバオですけど、で、さらに次にスペインに行きます。

スペインはこういうのばかりなんですよね。バルセロナにはサグラダファミリアがあります。

これですね。これもやはり200年かけてお寺をつくっているというその物語がやっぱり観光資源になっている。デザインもすごいですけど。

ロンドンのモニュメントなんかは、これは1666年のロンドン大火を記念したわけですけど、そういう災害も一つの観光資源になる。

ニューヨークのエンパイアステートビルも、今、WTCが壊されちゃったので、ここがマンハッタンで一番高いビルになっていますけれども、これもやはり世界大不況の1929年の後、不況だからいいものをつくろうとって高いものを建てたという心意気が人々の心を打つんだと思います。

ベルリンの壁もやはりいろいろな悲劇があったから、ここが観光資源になるということだと思います。そういうそれぞれのまちが、素晴らしいものがあるんですけど、同時にそこにストーリーがあるから観光が成り立つんだとすると、じゃあ、千代田は何なのかというと、私は、千代田は千代田が言うのもなんですけど、ここは日本の中心なんですね。

なぜ中心になったかというところに私はストーリーがあるんじゃないかという仮説を立てました。これは最初にそういう大きな仮説を立てたので、演繹法なんですけど、そうすると、太田道灌が江戸城をつくりました、徳川家康がここを首都と決めました、大久保利通がここで新政権を明治維新で樹立しました。という仮説で出発します。

太田道灌は、やはり品川の御殿山からおりてきて、この江戸に城をつくって、それで関東を平定したと、これなんですね。これが千代田が日本の中心になった始まりだったと思います。

そう思って、都庁は、今でも国際フォーラムに太田道灌像を置いているわけですけど、前の都庁があったところですね。

これもまた、太田道灌がただ功成り名遂げた人だけだとあれですけど、主君に呼び出されたときに、おめおめ、嫉妬されて殺されるとわかっていながら伊勢原に出向いたと、このやっぱり人生ドラマが心を打つんですね。ヤマブキ乙女がいいと言う人もいるかもしれませんが、私はこっちのほうがやっぱり、サラリーマンをやっていた身から言うと、よくわかるんですね。

こうして江戸城が日本の中心になりました。

このお濠の一つの日本橋川。これは飯田橋から見たところですけどね。

常に、その後、明治時代も江戸城がこの東京のまちの中心でした。

これは、東京の1945年の焼け野原のときの戦災復興計画ですけど、これもまた中心になっているわけですね、千代田が。

現代の不動産会社がつくる地価分布図というの、やはり同心円をかくのに皇居を中心に、江戸城を中心にかいている。現代にまで至っているわけです。

これは、現在東京都が公式に持っている関東平野に対する東京都のビジョンなんですけど、これもまた同心円的に江戸城が中心になっているということで、常にこれが中心になっているわけです。

そうなった過程では、ここにごちゃごちゃ書いてあって、これをやっているとい日かかりますので、きょうはしませんけど、要するにそこに例えば明治維新のときだけとっても、官軍と旧幕府軍との間に人生ドラマがたくさんある。これ、一人一人やっていくと物すごいおもしろい話があるいろいろなことになります。

千代田には、例えば紀尾井町に大久保利通が暗殺された碑が建っています。

これが現在の江戸城です。

そこは単に、江戸城ではなくて、実際に政治の中心地である国会があるし、霞が関の官庁街があるわけです。というふうに、なぜ千代田が日本の中心になったかという仮説から始めて、結論なんですけれど、やはり太田道灌が兵農分離を進めて関東を平定して、家康が日本を平定して、大久保利通が殖産興業で今日の日本の発展の基礎を築いたというふうに考えると、そこで千代田のストーリー性というのが見えてくるわけですし、そこに一つ一つの理屈もあるし、人生ドラマもあるということで、ですから千代田が観光というのを、単に便利さを追求するだけではなくて、そういう日本の中心になった歴史を語るということ、きょうこういうシンポジウムを議会と町会連合会とが一緒になって開催するような、そういう地域力、自治体の力によって発信していくと、これは世界のためになるんじゃないかということ、三大話みたいですけれど、いや三大話なんですけど（笑）、7分間でまとめさせてもらいました。

どうもありがとうございました。（拍手）

では、すみません、言いたいことは全部言っちゃったので、司会業に戻ります。

次に、高木さんでいいんですよね。はい。あ、全部きょうは、さんづけでさせていただきますので、次に高木さんをお願いします。

高木氏 それでは、7分というのは大変きついですけれども。

それでは、今、演繹法でも帰納法でも千代田が日本の中心という理論的な裏づけができましたので、私も観光協会長として、千代田区全般にわたってちょっとお話をしたいなと思います。

千代田区というのは、皆さんここにお住まいの方ですから、十分ご存じの方ばかりだと思いますけれども、江戸城、これが千代田城と呼ばれていたと。江戸城の周りには大名屋敷、旗本屋敷があった。千代田区が誕生したのは、太平洋戦争が終わった後、1947年だということです。今、人口が4万7,824人と。これがことしの10月1日現在の人数だそうなんですけれども、5万人というのが迫ってきております。

それで、これ、私、よく知らなかったのは、区の花が桜ということはわかっていたんですが、区の木は松。これまでもいいかなと思いますけど、区の鳥は何だと言われたときに白鳥というのがわからなかったんですけれども、実に白鳥だそうです。

千代田区は、言わずもがな皇居中心にして、それを取り巻く地域でできておりますけれども、これは、私ども観光協会のホームページの「食べる」ということを中心にまとめた地域分けなんですけれども、まず永田町・麴町周辺 あ、ごめんなさい。皇居がありますね。皇居は、もうこれは今のご説明どおり、江戸の歴史を承継している。その西側にあるのが永田町・麴町エリアということですが、これは食を中心に分類しているために霞が関という地域が出てこないんですけれども、まあ、この一帯でいいと思います。

それから次に、時計回りに回ると、九段・飯田橋地区になりますけれども、ここは神社・墓苑、あるいは坂と濠があります自然景観といったようなことで、この地区が構成されている。

それから、ずっと東に飛びまして秋葉原エリアですけれども、これも言わずもがな、世界一の電気街。それから、アニメ、ポップカルチャー等の最先端の文化の発信地でもあり

ます。非常に今、千代田区としては最先端の観光地の一つということになります。

その西側に神田・神保町エリアがありますが、これは江戸時代以来の老舗がたくさんあるということと、個性あるショッピングエリアということが言えると思います。

最後に東京駅前の丸の内・有楽町エリアですけれども、これはモダンな建物が多いわけですけれども、その中でもレトロを感じるものもあるということで、そういった建物が混在している。それから、最近では、ハイファッションで上質なショッピングエリアにもなっているということで、この六つの分類の地区が、おのおの大変個性が違った地域で構成されております。

それで、千代田区でいろいろ観光的な行事が行われておりますけれども、千代田区歳時記ということで、これは1月からずっとあります。初もうでには皇居に皆さんお集まりになりますし、それから日枝神社　ここでは、写真では日枝神社さんが出ていますけれども、神田神社、それ以外の神社さんも大変にぎわいます。

神田雪だるまフェアというのがありますが、これは千代田区が群馬県の嬭恋村と提携関係にあるということで、群馬県のそこと提携して雪だるまフェアをやっている。

2月の節分も、これもいろいろな神社で行われますけれども、3月には東京マラソン、さくらまつり。さくらまつりは区の事業としてやっておりましたけれども、数年前から観光協会がこれを引き受けまして、これから、後にも触れると思いますけれども、観光ばかりじゃなくて、観光のためにも環境と両立しなきゃいけないということで、実は千鳥ヶ淵の桜のライトアップを全部LED照明、700メートルにわたってLED照明をやっております。

4月にはラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン、これは東京国際フォーラムを中心にやっておりますし、5月は神田まつり。6月、山王祭、岩本町のファミリーバザール。次、7月は、靖国のみたままつり。8月が、今まで余りなかったんですけれども、そう言いつつも、日比谷公園の開園100周年を記念して、丸の内盆踊り大会というのが始まって、これがずっといつもやっております。9月が神田技芸祭。10月には、神田古本まつりと神保町ブックフェスティバル、スポーツ祭り、これ、三つ合わさったお祭りがありますし、お茶の水アートピクニックというのもあります。11月が、これまた日比谷公園で山梨ヌーボー祭り。これが山梨県と連携してやっているということです。12月は、代表例として光都東京、これは丸の内地区で、皇居を含めて、皇居のお濠を含めてライトアップするという行事があります。

これは、本当に千代田区内でいろいろなイベントが行われている中で代表的なものを取り上げたわけですけれども、千代田区においては、平成18年の12月、観光ビジョンを制定しました。観光ビジョンの理念というのは、住み集う多様な人々が誇りを持てるまちにということで、住みやすく、働きやすく、そして人々が交流しやすいまちということで、一過性の楽しみでなくて、あるいは単なる来街者を増加させるということではなくて、先ほど青山さんからお話がありましたように、ここで豊かな時間を過ごしていただきたい。そして地域の魅力を体感していただきたい。できれば地元の千代田区民と心の通った交流をしていただきたいと、こういったことを掲げております。

観光ビジョンの四つのテーマとして、歴史と文化と未来、これは江戸幕府開闢以来のことですけれども、それからまちあるき、これは今申し上げた多様性のあるまち、地域ごと

に非常に多様性があるので、まちあるきの中でいろいろ体験していただきたい。それから、左の下に、産業観光ということで、古くから神保町の本町、それから小川町のスポーツ用品の店の集まり、秋葉原の電気街、それから大手町、丸の内、有楽町地区、これビジネス街、ビジネスオンリーのまちだったのが、最近ではブランドショップもいろいろ出てきて、ショップも楽しめるようなまちになっている。

右下で、都市と地方の連携ということで、これは先ほど申し上げたイベントの中でも実現されてきております。

そして、今非常に変化している東京駅前の話をちょっといたしますが、江戸時代は江戸城中心の大名屋敷だったわけですが、それが、明治政府が払い下げをしてから、明治23年、1890年から丸の内の開発が始まりますけれども、右にあるあの黒い写真は、これはれんが街ができたところでありまして、それが東京駅、これが大正3年、1914年に東京駅ができて、この右下の絵は、これは昭和40年代の終わりぐらいに、ちょうどこれはお濠の南から北に向かって見ておりますけれども、旧建築基準法で大体30メートルの高さでまちなみがそろったところでありまして、

今、そのまちなみを変えるべく高層ビルを一生懸命つくっているわけですが、これは世界の都市間競争におくれてはいけないということがあるわけで、ただ、その中でハードのまち、ビルを建てかえるだけではないということをつくづく感じまして、建物を建てることからソフト面を重視していかなきゃいけないだろうというまちづくりに取り組んでおります。

ここにまた代表例で、左から言うと、スカイバス東京。これは10月30日に皆さんにもご試乗いただけることになっておりますけれども、普通のルートで言うと、東京駅前の三菱ビルから回って、代官町を通過して千鳥ヶ淵、それから霞が関の官庁街、それで銀座を通過して、また丸の内に戻るとということで、皇居を大幅に円を描いて、逆の時計回りで回って約1時間のコース。これに乗りますと、江戸東京の過去・現在・未来、未来というのは開発が進んでいるところも見られますので、そういうことが体験できる。

その右は丸の内シャトルで、大手・丸の内・有楽町地区を無料で巡回しているバス。光都東京、その右は、今申し上げた12月のイベント。

下の左がガーデニングショー。これは春ですね。夏には打ち水をやったり、その右のラ・フォル・ジュルネ、これは国際フォーラムで毎年行われているものです。

これは、東京駅前の絵が出てきましたけれども、お気づきのように、正面にある東京駅が、昔のというか、戦後の東京駅とたまたま変わっております、大正3年にできた当時のものに今復元中でございます。これが来年、再来年の春に完成するというので、行幸通りは今このようにきれいに整備されております。

東京駅前の広場が完成するのは、ちょっとまだ時間がかかるようではありますが、こういった景色になる。

丸の内のことをもう少し触れますと、丸の内パークビルというのが最近一番、昨年できたわけですが、この前にある一号館の復元というのを、これは昔の場所に、もとあった場所に、昔の工法、これはもう全くれんがづくりなんですけれども、れんがづくりで、しかも昭和43年、これ、壊したときに主要部分をきれいに取り外してありまして、それで使えるものは使い、復元に当たって、それを参考に、例えば鉄でできている部分なんか

は、忠実にそれをつくり直しています。それで完全に復元して、今でもここでレンガ造の構造物というのはできないわけですが、下に免震構造で基礎をかませましたので、それで特別にこれができた。

右上にありますように、丸の内パークビルという高層ビルがありますけれども、三菱一号館とパークビルの間を広場にして、空間として提供しているのが右下でございます。幸い、いろいろな方が、今、夏で暑いときでも、非常に昼も夜もにぎわっております。

時間がなくなってきましたので、この辺で飛ばしますけれども、一番最後のページをお願いします。

今後の千代田区の観光の可能性と書いてありますけれども、観光協会として、先ほど申し上げましたよう、観光と環境の調和、両立させようということで、現実動き始めてありますし、それと、やはりたくさんの方が訪れる中で、効果的な情報発信が一番大事だということで、これは今いろいろやっておりますけれども、特に、先ほど1月から12月までの主要なイベントをここに掲げましたけれども、実は、こうやって1月から全部いろいろな地区でやっているのを並べると大変なものになるんですけれども、いろいろな団体でやっているの、これは千代田区商店街連合会さんのお声がかかりで、関係団体みんな集まって、いろいろ取り組んでいるイベントを全部網羅して、それらをどうやってうまく発信しようかということ、今、検討しております。

それから、その次の積極的なインバウンドの取り組みということで、国、都、これは本当に総力で海外、それから全国からの誘致活動をやっておりますけれども、区も、区民の皆さん、それと、こちらからお誘いしなくても来られる方がいっぱいいますので、来街者の回遊がうまくいくようにということで、その辺を一生懸命考えておりますけれども、羽田空港が国際化のチャンスということでもありますので、区としても、やっぱり国と都、私も観光協会としても、これをもっと協力して充実していく必要があるだろうと思えます。

まちづくりを通しての観光施策ということでは、観光資源は実にたくさんあるわけですので、個性的なエリアの魅力アップをすると同時に、この地域地域、さっき六つに分けた地域がありますけれども、その地域間の連携をより密にして、区民の皆さんも、それからお勤めの方も、まちをよく理解して、それを訪れる方に還元していけるように、何とかさせていただきたいな、観光協会はそういうふうに見えるようにこれからは努力していきたいなと思っております。

ちょっと超過いたしました。失礼いたしました。

青山氏 はい。どうもどうも、ありがとうございました。（拍手）

では、続いて太田さん、よろしくをお願いします。

太田氏 はい。太田でございます。よろしくをお願いします。（拍手）

私の持ち分は、江戸城の魅力について話をすると、こういうことでございます。

私は、以前、皇居のそばの東京海上という会社に勤めておりました、そこに外国人がたくさんお客さんとして来られます。その最上階で、皇居を見ながらお話しすると、皆さん、異口同音に、この皇居は世界一美しいと、こういうふうにおっしゃいます。私は、この景色の美しさこそが最大の魅力だというふうに思っております。

以下、時間の関係でポイントだけお話ししますと、太田道灌という人は、徳川家康より

150年ほど前の人でございまして、江戸城をつくったのが1457年、戦国時代の幕あけのころでした。なぜここに城をつくったかというのは、政治的、軍事的な大きな理由があったんですけども、きょうはその説明を省略いたします。

当時、この江戸のまちは原野でございまして、アシとヨシとが茂る、本当の荒れ野でした。たった550年でこれだけの世界屈指の大都市ができ上がったわけですから、この人間の営みのすごさというのは大変なものだというふうに思います。

道灌が城をつくるとき、この場所に縄張りをしているときに、その縄張りの中の村の名前を、近くの働いている百姓さんに道灌が聞いたんですね。この村の名前は何ていうんだと。そうしたらその百姓は、千代田村、祝田村、宝田村だと、こういうふうに答えたわけです。道灌さんは、それはまことに吉兆な名前ばかりである、この城の繁栄疑いなしと、こういうふうに語ったと言われております。事実、この城は、戦火によって落城したことはない、まことに運の強い城でございまして。

この写真は、北桔橋門近くの三日月堀でして、道灌が築城したころの姿を一番色濃く残していると言われております。あと、現在の皇居の中に道灌堀というのがございまして、それは一般の人が入ることはできません。

江戸城は、風水によって四神相応の配置となっております。私のこの感じでは、この城は、今の若い人が言うパワースポットではないかと考えております。運も強く、地震にも強く、水もかかれたことはございませぬ。

これは平川門のところにあります、太田道灌追慕の碑です。昭和11年に、道灌の450回忌を記念して、城の石垣を利用してつくられました。

これは、追慕の碑の隣にあります説明板でして、3年前に築城550年を記念して、千代田区観光協会のご支援のもとでつくられました。この説明板があるだけで、今までこの碑の前を素通りしていた人たちも、足をとめて見ております。やはり、この歴史的なものは、知識があってこそ興味がわくものだというふうに思っております、このような説明板は非常に大切だと思っております。

これは、江戸図屏風と言われまして、寛永年間、1650年ごろの江戸城の様子が描かれております。ここに5層の天守閣が描かれている点にご注目ください。この天守閣は、ご承知のとおり、1657年の明暦の大火によりまして焼失してしましまして、以後復元されておられません。

これが東御苑で、今の姿です。先ほどの屏風図にありましたように、ここに建物がひしめいていたわけですが、明治政府は江戸幕府のものを徹底的に破却しまして、今は、ごらんとおり芝生でございまして。昔は、手前から表、中奥、大奥とありまして、一番奥のほうの向こうのほうに天守台が見えます。余談ですけども、この建物群の中で、大奥が半分以上を占めてございまして、そこに女性ばかり2,000人から3,000人勤めていたと、こういうことですから驚きです。この東御苑は、案外今知られておらず、都会の穴場だというふうに私は思います。こんなに素晴らしいところがありますので、もっともっと活用する方法を考えたらよろしいかと思っております。

これは天守台でして、火事の後、石垣だけは加賀藩が積みました。

私は、ここに天守閣を再建しようという会、NPO法人江戸城再建を目指す会に入会しております。この会の理事長の小竹さんが常々言われているんですけども、世界の大都市

には必ず歴史的・文化的モニュメントがある、と。我々日本には、世界に誇れる文化・伝統がありますが、そのシンボルとして江戸城天守閣を建てたいというものです。当会は会員がどんどん今ふえておりまして、2,000名になりました。そしてこの6月17日に復元図を発表しました。城郭研究者として当代随一の、広島大学の三浦正幸という先生に復元図をお願いしたものです。詳細は後ほど時間があればご説明したいと思いますけども、きょうはCGを持ってきておりますので、ちょっとごらんください。

〔CG上映〕

太田氏 この復元図は、6月17日に発表して、それ以来マスコミに大きく取り上げられて、反響もどんどん大きくなりつつあります。この千代田区から、この夢を全国に発信して、これから我々も活動をどんどん強化していきたいというふうに思いますので、ぜひ皆さん、ご支援をよろしくお願いしたいと思います。

以上で私の説明を終わらせていただきます。（拍手）

青山氏 どうもありがとうございました。

では、お待たせしました。山王さん、よろしく申し上げます。

山王氏 皆さん、こんばんは。（拍手）

私は、約20年前に千代田区の職員を中国にご案内したことがあります。あれから随分年月がたちましたが、今度は中国人観光客を千代田区にご案内できたらいいなと思っております。

さて、前までの中国人観光客は、団体が多かったですが、最近個人旅行がふえてきました。個人旅行は中国人からいうと、自由旅行と言います。しかし、中国での自由旅行は、まだ不自由に感じるところがあるようです。例えば、日本での自由旅行は、まだ、中国人観光客はレンタカーは借りられません。先週末、テレビの報道によりますと、北海道では、政府に観光特区に申請する際に、北海道に観光する中国人に対し、レンタカーを借りるプレゼンテーションをしました。それが実現できれば、日本観光はもっと自由になるに違いありません。

観光整備に関しては、日本は徐々にやっていくでしょうが、日本人の習慣は、一步一步きちんとやっていくタイプです。逆に、中国人は、飛躍が好きなタイプです（笑）。例えば中国は、家庭用固定電話社会を飛び越えて、いきなり携帯社会になりました。普通でしたら、中国人はいまだに家庭用の固定電話を普及する段階のはずなんですが、今は固定電話を持ったこともないたくさんの方が、いきなり携帯電話を使用するようになりました。中国人観光客に対する対応がもっと早くできたら、日本の観光素質をもっとアピールできるでしょう。

中国人観光客は、一生懸命、日本独特の文化、景観や、独自のサービススタイルを探し求め、日本性を探します。日本の独自の文化は、代々引き継がれ、決してほかの国が簡単にまねできるものではありません。日本では、有形と無形の文化財産がとてもよく保存されています。それに、清潔で、自然豊かな環境、先進的な技術がありますので、日本は、アジア、そして世界一魅力あふれる観光地になれると私は思います。その対応とスピードが重要です。

観光客の立場から話をしましたが、少し日本人の立場から見ますと、中国人観光客は、例えばトイレトペーパーを流さないとか、声が大きくてうるさいなどで、余りいい

印象を受けませんが、実際に私は中国に行って2日目は、1日目より声が大きくなります。そして、3日目は2日目より声はもっと大きくなります。周りの人の声が大きいのので、自分の声を大きくしないと、人に聞いてもらえないときがあるからです。日本に戻ってから、声を日本人に合わせようとしても、2日間ぐらいかかってしまいます。

日本はもっと中国人観光客にいろいろな情報を発信し、日本の習慣をしっかりと伝えれば、ほとんどの中国人は気をつけますし、礼儀正しくなると思います。何しろ、中国人はメンツを大事にする国民ですから、やっぱり人に見下げられたり、恥をかいいたりしたくないです。飛行機に乗れば3時間前後で着く二つの国です。顔は似ていますが、文化は違いますし、受けた教育も違います。お互いに多かれ少なかれ受けた教育などの影響で、相手に対し、先入観を持っています。

ただし、間違いなく言えるのは、日本に来た中国人観光客は、来る前より日本人が好きになります。彼らは、口をそろえて、日本の空気は新鮮で、空は青く、水はおいしいと言っています。もっと細心に観察する人はこう言います。日本人は清潔な服を着て、親切で優しく穏やかです。順序よく行き来する上に、お互いに譲り合い、しかし、ぶつかりそうなき、軽くおじぎをし、謝ります。その姿はとても優雅で美しいです。日本で受けたサービスは、ほかのどの国よりもよいです。大変いやされました。

ですから、中国人は一度や二度の観光ではなく、休暇の最優先の場にしたいと言っています。そういった観光客がふえればふえるほど、日本人を好きになる中国人がふえるでしょう。その民間交流を通じて、真の日中友好が生まれると私は信じております。

以上。謝謝。どうもありがとうございました。（拍手）

青山氏 どうもありがとうございました。

今、お三人のパネラーの方から、本日の千代田の観光というテーマに対するお話を伺いました。

当初の予定では、パネルディスカッションを二つに分ける予定でした。千代田にいろいろな観光資源があるけれども何が一番の観光資源かということを一に議論して、それから第二に、したがってこれからどうするかということも議論しようということだったんですけど、大体今の第一の何があるかという話は出ちゃったみたいなので、これは省略して、いきなり、これから千代田の観光はどうすればいいのかというお話にしたいと思うんですけども、パネラーの皆さん、それでよろしいですか。

〔「了承」と呼ぶ者あり〕

青山氏 はい。ありがとうございます。じゃあ、そうさせていただきます。

まず、いろいろお話があった中で、これからどうするかというお話になるわけですけど、やっぱりCGがちょっとインパクトがあったので（笑）、太田さんの天守閣の話について、後で説明してもいいと言っていた話のうち、一番聞きたいのは、お金は幾らぐらい要るんでしょうか（笑）。

太田氏 まだ、幾らか、全然わかりません（笑）。数百億円だと思ってしまうんですけども、四国の大津城というのが、一昨年、木造で全く新しく建て直したんですけども、それが14億円ですから、その20倍から30倍とも言われているんですけども、わかりません。どういう木材を使うかによって全然違いますし、これからそれを、復元図はできましたけども、設計図をつくって、それからどういう木を使うとか、そういうことをやっていって値

段を出して、それから関係各省庁にお話をして、それから宮内庁に話をすると、そういうような順番でやっていきますので、まだ値段がはっきり言えません。

先ほど徳川さんが、大変お金がかかるとおっしゃっていましたが、かかると思いません(笑)。

青山氏 かかっても、多分500億とか1,000億とかかかるんじゃないんだと思うんですよね。多分、大津城が14億だったら、江戸城は、まあかかっても100億とかね、そのぐらい、どうなんですかね、募金で(笑)。税金じゃなくても。江戸城の天守閣だったら、日本国民がみんな見たいですよ、きっと。

太田氏 やっぱ、各国に誇れるものをみんな持っているんですね、各都市は。ニューヨークは自由の女神、ロンドンは大英博物館から、エリザベス女王の宮殿ですね。バッキンガム宮殿ですね。それから、パリはノートルダム寺院から、ベルサイユ宮殿から、凱旋門から、いっぱいありますね。それから、北京は紫禁城がございますね。じゃあ、東京は何があるかと。東京タワーとスカイツリーと(笑)。これ、やっぱり、ちょっとどこか違うんですよ。そこに歴史とか伝統が、これだけ日本がある、しかもこの城の形というのは、世界に類を見ない、独特の形です。日本の国民が苦勞して苦勞してつくった。今や平和の象徴ということで、日本の各都市には必ず城があるわけです。それがへそみたいになっています。

やはり、日本の中心である東京に天守閣が欲しいなと。壮大な夢を持っているんですけども、いかがでしょうか。

青山氏 私、谷中の五重塔の募金の趣意書というのを書かせていただいたことがあるんですけど、残念ながらまだ運動は始まっていないんですけど、多分税金でつくるんじゃないかと、江戸城の天守閣だったらみんな協力すると思うんですけど。だって、山王さんも見たいでしょ。

山王氏 あ、とても見たいです(笑)。

青山氏 多分、高木さんの会社も協力するんじゃないかと(笑)。

太田氏 ああ、ぜひお願いします。(拍手)

高木氏 これ、やっぱり、あれですよ、江戸城を見たいという人はたくさんいるんですよ。だから どうやったらいいですかね。

ただ、一つね、僕は、ついせんだって、金沢市立美術館、21世紀何とか美術館。あれ、200億かかっているんだそうですね。あれは土地の払い下げを受けて、それでなおかつ建物をつくって、中に入れて。あれは現代美術ですから、そんな高い値段のものがたくさんあるわけじゃないんでしょうけど、でも、金沢市で200億のものをやって、しかも、あれ、今でも年間100万人以上見えているというんですね。それで、市民の方がリピートする率というのが物すごい高いということで、やっぱり、市民の生活に根づいた美術館になっている。と同時に、外からたくさん人が来るといって、その初代の館長さんが今度兵庫県立美術館の館長さんに、つい最近なりましたね。

ですから、一つの建物は、その建物が立派だというだけじゃなくて、やっぱり、その地域で支持されているということが非常に大きいと思うんですね。やっぱり、その住民の人が本当にそれを愛して、愛していると誇りに思って、おれのところはこういうのあるよと、こういうことにもなるし。ですから、そういうふうな江戸城ができると一番いいなと

思いますね。

青山氏 それと、多分無料じゃないから、もともとれるんですよね（笑）。

太田氏 今、日本に来る観光客というのは830万人ぐらいで、その6割が東京ですね。例えば大阪に行く外国の観光客で一番行くところは、やっぱり大阪城なんです。ですから、やはりここで東京に来られた外国の観光客が、江戸城を見て、ああ、日本の城というのはいいなということで、さらに地方の城を見に行くと、こういうことになれば、もっともつと効果が上がるし、この観光事業というのは、アンブレラ産業といって、下に落とす金額は大変なものなんですよ。

青山氏 そうなんです。ちなみに、東京スカイツリーも、実は放送権料で電波塔として入ってくる収入よりも、観光収入のほうが多分多くなるんですよ。東京タワー、あれ、放送権料が入らなくなったらなくなるかという、観光収入でこれからもやっていくんですよ。だから、相当大きいんですよ、あれ。

太田氏 だから、江戸城を見て、それから大手門を出て、それから先ほど言った行幸通り、東京駅へ向かって、それから仲通りをずっとウインドーショッピングして、それから銀座で食事して、というようなところを通れば、これは本当に素晴らしい観光ルートだというふうに思いますので、ぜひ、実現したいなと思います。

青山氏 はい。じゃあ、この問題は来年の統一地方選挙の争点にするということにして（笑）、置いておいて。

どうなんでしょうか、山王さんね、中国と日本の交流とかにかかわっていらして、千代田区に外国の方が観光に来る場合、多分日本の地方の人も共通だと思うんですけど、もうちょっとこうすれば、もっとよくなるんじゃないかというふうな注文とか不満とかがあると思うんですけど、それを遠慮なくおっしゃっていただいたらどうかと思うんですけど、どうでしょうか。

私なんかは、外国人を連れてくるときに、やっぱり皇居は一つのポイントなんですけどね、とにかくやたらと歩かされる割には座るところがないとか、そういう苦情が、それから何か記念に買って帰りたいんだけど何にも売ってないの、と言われるんですよ。何かそういう、結構あるんですけど、そういうことを感じることはございませんでしょうか。

山王氏 注文というよりは、先日、友人を皇居へ案内しましたんですが、やっぱり非常にきれいで、個人旅行でしたので、周りは全部散歩しましたんですが、白鳥とか、大きいお魚とかカメとか、いっぱい写真を撮りました。それで非常に感嘆しましたんで、要は、やっぱり日本はすごく文明の高い国です。要するに、動物を見ればすぐわかります。要は、こんなきれいな環境の中ですんでいますから。

ですけれども、要は個人観光客にとっては、やっぱりツアーではないですので、そこら辺散歩をしていると、ちょっと迷子になりそうな感じと言いましたんです。情報とか、ちょっと少ないそうなんです。要するに、交通は、どういう交通網とか、そのスポットとスポットの間の関連性がちょっとつかみにくいと言っていましたんです。ですから、団体はいいんですけども、そこにおろしてくれそうですけれども、個人で来ると、そこでちょっとわからなくなりそうな感じと言っていました。

青山氏 うん。さっき太田さんから、案内板一枚、千代田の観光協会で作ってもらって随分変わったというお話がありましたけど、それは、説明とか、観光資源というか、歴

史的な遺産の説明とか、それからマップ、地図だとか、いろいろなものがまだ、もっと欲しいということですか。

山王氏 ええ。そういう情報があれば、もっと便利になると思います。

青山氏 はい。ありがとうございました。そういうのは、例えば大手町・丸の内・有楽町地区だけでも足りないんじゃないですか。そんなことはないですか。

高木氏 そうですね、今私どものビルも、ある程度中国・韓国の人にわかるようにということを心がけ始めているんですけど、ただ、私が昼休みに散歩していると、本当に個人のお客さんが、地下鉄の改札口の前で困っているんですね。時々声をかけてあげるんですけど、こっちも語学に自信があるわけじゃないんで、英語じゃなく答えられたら何て言おうかとか思うんですから、あれなんですけど。老人ご夫婦で、こうやって地下鉄のあれを見てね、困っている人がいるんですよ。だから、そうすると声をかけて、それじゃ、このレッドラインのところのこの駅ですよとか、ここで乗りかえて黄色いラインに行っ、終点までですよとかね、そういうことぐらいは言えるんですけど、交通手段は非常にたくさんあるのに、今、山王さんがおっしゃったように、移動するとき、本当に駅へ行って立ちどまっちゃうということが多いで、その辺が、表示の問題も含めて、もっと外国の方に行き届いたようにしなきゃいけないだろうと思いますね、全般的に。

青山氏 その場合、高木さんのところはというか、高木さんの会社は、千代田区も入っているんですけど、大手町・丸の内・有楽町地区の百数十ヘクタールについて、いろいろタウンマネジメントという、今はやりのことをやっているじゃないですか。そういう中でやはり取り組んでいらっしゃるんですね。

高木氏 そうですね。それと、だから交通機関も含めて、地域全体で、もっとそこを充実しないと、一番緊急のことかもしれませんね。

青山氏 なるほどね。まだサイン計画は検討の余地があるということだと思っんですけど。

さっきの、山王さん、私は、外国人にちょっとした、高いものじゃなくて、ちょっとしたお土産があったほうがいいと思うんですけど、よくお土産を買うところがないのかと言われるんですけど、千代田区内にはもちろんブランドショップはたくさんあるんですけど、だけど、彼らが欲しいのは数百円のお土産なんですよね。秋葉原はあるんですけど。そうじゃなくて、数百円のお土産が欲しいという。そう思いませんか。

山王氏 そうですね。高いものも求めますけれども、なるべくメイド・イン・ジャパンのほうがいいですので、やっぱり安いところは結構、せっかく行って、それから見たら全部メイド・イン・チャイナなので(笑)、せっかくですから、それだったらもう近所のおばさんでもつくったんじゃないんですかと疑われるので、やっぱりメイド・イン・ジャパンのほうが一番多分喜ばれると思います。

青山氏 あと、それから、私は千代田区に勤務しているものですから、というか、都庁もずっと千代田区にお世話になっていたんで、私の人生では千代田区に通勤していた時間が一番長いんですけど、やっぱり千代田区で何か欲しいなと思うとしたら、それはやっぱり、サラリーマンが食べる場所はあるんですけど、観光客が食べる場所って、どれだけあるんですかね。

つまり また高木さんの顔を見ちゃうんですけど、すごく一流のいいものを食べると

ころはあっても、それからサラリーマンが食べるころはあっても、観光客が食べるころって、案外千代田区は少ないと私は思うんですよ。

高木氏 いや、千代田区も、神田とか、こちらに来ると随分ありますよね。丸の内も決して高いものばかりじゃないんですよ（笑）。なんて、丸ビルの35、36階は高いですけど、5階とかあのあたりですと、全然そんな高くない。ただ、入りにくいのかもかもしれませんね。

丸ビルから今度新丸ビルをつくったときに、丸ビルの店舗配置と比べると、新丸ビルの店舗配置のほうが比較的すっと入りやすい感じになっていると思いますが、その辺はやっぱり、そういうものがありますよじゃなくて、利用される方がすっと入れるような店構えも必要だろうし、リーズナブルな価格体系だということを十分徹底して、PRしなきゃいけないと思いますけど。

青山氏 なるほど。

それからもう一つ、イベントなんですけど、千代田の各地のまちのお祭りって、物すごい魅力的なんですよ。それがあんまり外国人に来てほしくないのか、見てもらってもいいのかということ、そういう情報 あれ、実はお祭りをやっている人たちが思っている以上に物すごい貴重な資源なんですよ。もしできれば、もうちょっと外国人に見せてあげるような情報提供なんかする手もあるんじゃないかと思うんですけど、どうですかね、山王さん。お祭り、見たことない、千代田の。

山王氏 まだ。申しわけありませんけど、まだないんですけども。これからぜひ見たいと思っております。

青山氏 そうですか。

あと、高木さん、ミレナリオは何でやめちゃったんですか（笑）。

高木氏 あれは、実は安全ということからなんですけれども、東京駅が今のように復元の工事に入りましたね。そうすると、北口も南口もほとんど板囲いをして、通路が大変で、ミレナリオのときにほとんど利用する方は、もちろんメトロも使うんですけども、JRが多くて、JRサイドが、特にやっぱり、工事期間中の安全ということについて物すごい心配なさったと聞いています。

青山氏 東京で100万人を集めるお祭りって、三つあったんですよ。一つが隅田川花火大会。それから一つが高円寺阿波踊り。もう一つがミレナリオだったんですよ。そのミレナリオにかわるものを千代田でやりましょう。天下祭。あれを100万人のお祭りにする。ちょっと無理かな。まあ、連発でもいいですけど。

何かそういう計画があるんですか。またイベントをやるうとか。

高木氏 まあ、どうなりますかね。今、東京駅が復元できるのが、来年、再来年の春ということですけど、地下の部分も含めて全部できるというのは、もう少し時間がかかると思うんですね。

青山氏 やっぱり、太田さん、あれですね、天守閣に期待するのが一番（笑）。

太田氏 これはもう。

青山氏 要するに、核になるものがあると。

太田氏 いや、そうなんです。やっぱり、核になる。建物も、これ、建物があるだけで誇りを持てるんですよ。

新長田という、神戸の向こうにある、地震でほぼ壊滅みたいになったまちがありますけども、あそこに鉄人28号をつくったんですね。

青山氏 そうですね。

太田氏 18メートルで、おなかの回りが20メートルある。あれで今、人の流れはすっかり変わっちゃって、それでまちのタウンも活性化して、みんな生き生きとしていますよね。やはりああいう、おれたちの何か誇りになるものがあるということは物すごく大事なことでして、これを、今、日本人が失われつつある誇りとか、そういうものを取り返すために、ぜひ、こういう江戸城 江戸城と叫べたら、これはもう今までの天守閣の中の総集編みたいな、最高の徳のあるお城ですから、それをぜひつくってみたいなというふうに思います。

青山氏 はい。ありがとうございました。

じゃあ、私の問題意識だけだと偏っている可能性があるのですが、場内の皆さんから、こういうことはどうなのかというご指摘とかご質問とか、これだけのパネラーの方をそろえていただきましたので、何かございましたら、どうぞご発言いただきたいと思います。

いかがですか。（発言する者あり）そうですね、お願いします。

第2部 司会 それでは、大分所定の時間になってまいりました。質疑応答を10分ほど予定をしております。もし何かお聞きになりたいこと、あるいは、こんなことをやれないのというようなご意見がありましたら、手を挙げていただければ、そこへマイクを持ってまいります。何かございますでしょうか。

きょうのテーマは、恐らく区民集会の中でもかなり異色のテーマではないかなというふうに思いました。しかし、かつて、固定資産税や相続税をもっと都心に優しくしろというような運動をしていたころから比べると、かなり文化度が上がってきたなという感じがいたします。

千代田区民にとって、恐らく千代田区が観光スポットだと思っていない方が圧倒的に多いんじゃないかと。しかし、先ほどのパネラーのお話にもありますように、日本へ来る外国の観光客の6割は東京へ来ているんですよ。しかも、実は東京商工会議所は、東京23区一帯の会議所なんですけど、23人の各支部会長さんとそういうお話をしていると、足立区だとか練馬区に外国人の観光客は来ませんよ、と。じゃあ、どこへ行っているんだろう。そうすると、銀座、浅草、皇居、上野、こういう、都心の歴史と文化が昔からつながっている、それから、まちが歴史と文化の情緒をいまだに保っているようなところがやはり好まれるんだと、こういう話も商工会議所なんかでは出ます。

ですから、きょうの区民集会のこのテーマは、一見皆さんに余り興味関心がないかもしれないんですが、実は多くの方々が外国から来られて、東京らしい東京を見たい、味わいたい、体感したい、そういうニーズがたくさんあるんだということを、千代田区あるいは千代田区民として、区民集会のテーマで取り上げられたことを契機に、みんなでこれからも考えていったらいいかと、私なんかは商工会議所の活動でもそういう方向を持っていますけれども、それには、観光の条件というのはやっぱり安心で安全。それから、人々が優しいといいますかね、だれにでも優しく対応できるというのは、一つの大きな条件だというふうに思うんです。これは、黙っていてできることではなくて、やはりこういったテーマを設けて、みんなで考えてみるころから、もう一歩前進できるのではないかと、そんな

ふうにも感じております。

特にご質問がないようでしたら、あと5分ぐらい時間の余裕がありますが、青山さん、何か最後の総まとめ、ございますか。

青山氏 手を挙げています。

第2部 司会 あ、いらっしゃる。はい、どうぞ。

参加者A すみません。飯田橋のホボと申します。

過去にもちょっと出して、皆様に笑われたことがあるんですが、世界には、ル・マンとかモナコとか、市街地でやるレースがあるんですね。東京の皇居グランプリなんていうのは絶対おもしろいと思うんですが、いかがでございましょうか(笑)。

第2部 司会 では、青山先生のほうから、皆さんに聞いてください。

青山氏 これは天守閣に匹敵する話だと思うんですが、意外性ですよ。三宅島がオートバイのレースが、だめだ、だめだとメーカーさんに言われながら何とか、何とかだんだん、こっちは山の中腹のほうで、実際、各社が参加してやることになりましたけど、長年やっている、何とかこう、その島なりのことができるようになる。

私は、マン島のレースを見に行ったことがあるんですけど、三宅の村長も行って、私は別に行ったんですけど、行ったりしているんですけど、やっぱり、意外性があるところがいいですよ。

ですから、千代田のこういうところでそういうレースをやるって、物すごく意外性がありますから、あれはへんぴな あ、失礼。失礼かもしれないけど、田舎でやるかと思うと、それを世界一の金融街でやるかいうと、意外性があっていいんじゃないかと思うんですけど、でも、ちょっと高木さんが困っているみたいです(笑)。どうですかね。

高木氏 いやあ、おもしろいと思います。

青山氏 どうせできっこないと思っているでしょ(笑)。

高木氏 東京マラソンがありますね。あれがあんなに人気になっているわけですから。

青山氏 ええ。あれだって、最初は悪口ばかり言われたんですよ。(発言する者あり) ええ。結局、石原都政12年間で一番の功績は、東京マラソンですよ。ほかにないと言っているんじゃないですよ(笑)。

私、言い続けることが必要だと思いますけど。

第2部 司会 はい。ありがとうございます。東京マラソンも、交通渋滞などで警視庁は大反対なんだそうですけれども、それでもやはりおもしろいなというふうに思いますね。

ほかにはいらっしゃいませんか。どうぞ。

参加者B すみません。秋葉原のミヤザワと申します。

これ、行政のほうにお願いになってしまおうようになってしまおうと思うんですけども、この活性化するというのに当たって、渋谷とか浅草、向こうのほうというのはコミュニティバスがすごく充実しているんですね。ああいうバスに乗って、皆さん、観光地をいろいろ動いたりとか、そういうことをしているんですが、千代田区はこういう、一般の方は熱心なんですけども、区のほうがそういった観光に対して、ちょっと考えが薄いのかなと思うんですね。

台東区のバスに私も乗ってみたときに、地方の学生さんが乗ってきて、若い方が本当に

乗ってきて、ああ助かった、このバス、こういうのがあったんだと。それで、運転手さんに、どこどこ、浅草の、要するに観音様に行きたいんだけどどう行ったらいいんだ、とか聞いて。でも、バス停には観音様はないんですね。バスの運転手さんがとても親切に教えてくださっていて、そこでまた住民と地域との、観光客とのつながりが出てくると思うんです。

ですから、先ほど山王さんがおっしゃったように、やはりそういった、観光にはルートというものを回すようにしないと、その1カ所に、江戸城の天守ですか、あれを建てたからといって、それで人は、リピーターは来ないと思うんですね。いろいろ充実を図って、周りもやっぱり固めていかなくちゃいけないと思うんですけども、その辺はいかがなのか。

青山氏 それは、高木さんのところだけはやっているんですね。

高木氏 大手・丸の内・有楽町はやっています。

参加者B そうですね。メトロのバス、知っております。

高木氏 あと、日本橋のほうもやっています。

参加者B はい。

青山氏 そう、日本橋もやっていますね。

高木氏 だから、そういうのが幾つかできてくるとね。

参加者B ええ、そうなんです。

青山氏 もうちょっとね。

参加者B あれがあれば、もっといろんな地域とも結びつきができてきて、その観光客もまたこちらへ呼び込めるようになると思うんですね。ですから、ぜひその辺を、皆さん、せっかく、お偉い、著名の方が集まっていってらっしゃるので、何とか。

青山氏 区役所の幹部も、副区長さんもうなずいて聞いていますので（笑）。

参加者B はい。あと、バスもちょっと貧弱だと思うんですね（笑）。渋谷にしても台東区にしても、とても立派になっていると思うので、その辺もちょっと観光客を選ぶような……

青山氏 ぜひ、区議会と連合町会と一緒にどこか、例えばバルセロナのバス。世界で乗った、私、ぐるぐる回るバスで一番いいのは、充実しているのは、バルセロナですよ。

参加者B そうですよ。それだけでも観光客はおもしろがって来ると思う。

青山氏 ぜひ視察に行ってください、皆さんで。

第2部 司会 はい。どうもありがとうございました。

ちょうど予定の時間になったようですので、そろそろここでパネルディスカッションを終了させていただきたいと思います。大変豪華なパネリストをそろえた割には時間が短くて、申しわけありませんでした。パネリストの皆様、一度盛大な拍手をお願いしたいと思います。（拍手）

どうぞ、そのまま席におつきください。

それでは、最後に、鎌倉勤神保町地区町会連合会会長より、閉会のごあいさつを申し上げます。（拍手）

鎌倉神保町地区町会連合会会長 大変お忙しい中、あるいは、本来なら家庭団らんの時間、そしてまた天候不順の折、皆様方には早い時間から長時間ご清聴を賜りまして、まこ

とにありがとうございました。

そしてまた、本日の講師、コーディネーター、パネラーをお務めいただいた皆様方、本日の出演を快諾していただきまして、そしてその上に、大変示唆に富んだ含蓄のあるご意見、ご提案をいただきまして、ありがとうございました。

千代田区議会、そして八つの千代田区内の連合町会といたしましても、今後、一層、千代田区の活性化、そしてまた千代田区のあるべき姿に向かって努力をしてまいりたいと思います。

本日のこのシンポジウムを契機といたしまして、ご出席の皆様方には、より一層、今後とも、千代田区の行政、あるいは観光協会、そして各種団体に対しまして、ご協力、ご支援を賜りますようお願いを申し上げまして、閉会のごあいさつとさせていただきます。

ありがとうございました。（拍手）

第2部 司会 それでは、以上をもちまして、千代田の景観と観光を考えるシンポジウムを閉会とさせていただきます。

どうも、長時間ありがとうございました。（拍手）

午後9時00分閉会